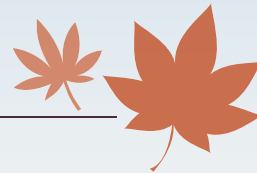


玉堂展を楽しもう



9月29日(金)から、いよいよ浦上玉堂展が始まります。

●まずは、担当学芸員にインタビュー



Q.

玉堂は自分で琴をつくっていたそうですね。

A. はい。

七絃琴をこよなく愛していたことで知られる玉堂ですが、自ら琴を制作していました。その数は1つや2つではありません。今回はそのうち、6点*の玉堂お手製「七絃琴」が展示されます。



*千葉市立美術館では、7点が展示予定。

Q.

会期中、展示替えは行われるのですか？

A. はい。

例えば当館では、〈東雲節雪図〉(国宝)は10月17日から22日、〈秋色半分図〉(重要文化財)は10月17日から29日のみの展示となります。

お目当ての作品を見逃さないようご注意ください。

展示替えの詳細内容は、当館へお問い合わせください。

浦上玉堂展 関連イベント

座談会「玉堂を語る」

10月1日(日) 14:00~15:30(開場13:30)

パネリスト：小林忠(千葉市美術館館長) 佐藤康宏(東京大学教授) 守安収(当館学芸課長)

会場：県立美術館2階ホール、先着順、聴講無料(定員210名)

七絃琴コンサート

- 玉堂琴譜を中心に -

10月8日(日) 17:30~19:00(開場17:00)

演奏者：坂田進一(琴士 作・編曲家) 開場：県立美術館2階ホール(定員210名) 料金：前売1,500円 当日2,000円

美術館講座「浦上玉堂の世界」

10月15日(日) 14:00~15:30(開場13:30)

講師：守安収(当館学芸課長) 会場：県立美術館2階ホール、先着順、聴講無料(定員210名)

社会人のための 美術の夕べ

「浦上玉堂展をみる」

10月27日(金) 18:00~19:00

会場：浦上玉堂展展示室 ※事前の申込みは不要です。

そして...

作品鑑賞の合間や後でちょっとひとやすみしたい、そんな時は喫茶店「ちやい夢」をご利用ください。蒸り高いサイフォンコーヒーと焼きたてワッフルがおすすめです。



浦上玉堂(山高水長図)



これからの展覧会

特別展	9月29日(金) ▶ 10月29日(日)	浦上玉堂展
	11月16日(木) ▶ 12月 3日(日)	第53回日本伝統工芸展
	12月16日(土) ▶ 12月24日(日)	第66回国際写真サロン入選作品展
	1月 5日(金) ▶ 1月28日(日)	新春特別展示 棟方志功と芹沢銈介
	2月 9日(金) ▶ 3月11日(日)	東島毅展

ワークショップ

- 10月21日(土)・22日(日) 美術ってなーに？
- 11月11日(土) 「和への誘い」 講師：山内啓左(京表具 墨申堂) 去年ご好評いただいた表具師 山内啓左さんによるワークショップの第2弾です。京表具について、またこれまで手がけられた当館収蔵品のお話などをうかがえます。

※ 詳細な内容については、1ヶ月前を目途にチラシ等でお知らせする予定です。美術館までお問い合わせください。

美術館講座

- 9月 9日(土) 「表現と鑑賞」…………… 廣畑 浩(学芸課主幹)
- 10月1日(日) 座談会「玉堂を語る」 **パネリスト**
 - 小林 忠(千葉市美術館館長)
 - 佐藤康宏(東京大学教授)
 - 守安 収(学芸課長)
- 10月15日(日) 「浦上玉堂の世界」…………… 守安 収(学芸課長)
- 11月 4日(土) 「劉生容 台湾と日本」…………… 妹尾克己(主任学芸員)
- 12月 9日(土) 「西洋から見た日本—ケンペルの残したスケッチを中心として—」…………… 細田樹里(学芸員)

・時間 いずれも午後2時~午後3時30分 (開場は午後1時30分)

・会場

- …地下1階講義室(定員70名)
- …2階ホール(定員210名)

・聴講無料、事前申込み不要、先着順

社会人のための美術の夕べ

- 9月22日(金) 入門・岡山美術④ 岡山ゆかりの日本画作品について解説します。
- 10月27日(金) 浦上玉堂展をみる 文人画家玉堂の自由な精神、詩情あふれる作品に迫ります。
- 11月24日(金) 第53回日本伝統工芸展岡山展をみる 本年度の受賞作品を中心に各分野の見どころを解説します。

・時間 午後6時~午後7時
・会場 2階または地下1階展示室
・募集人数 約20名(事前申し込み不要)
・参加費 常設展観覧料 / 各企画展観覧料

たそがれコンサート

- 10月 6日(金) 山路みほ(箏曲家)&ヴォーカル4(男性コーラスグループ) ジョイントコンサート
- 10月25日(水) 伊丹典子「マンドリンコンサート」

・時間 午後5時半~午後6時半
・会場 美術館中庭
・入場無料

秋の日のたそがれ時のひととき、風情ある中庭で、音楽をお楽しみください。



編集後記

今号編集の目途がついた7月某日。外は入道雲がお目見えして、梅雨明け目前の空が広がっています。このニュースが発行される頃には、空もぐんと遠くなって、秋の気配を感じさせてくれることでしょう。夏の暑さが和らいだら、芸術の秋の始まりです。岡山生まれの文人、浦上玉堂の世界を訪ねてみませんか。館員一同、お待ちしております。(T.Y.)

表紙の作品

浦上 玉堂

URAKAMI Gyokudo

「山高水長図」

本図のように画面の片側に主たる構成要素がまとまって存在する偏った構成は玉堂作品には珍しい。しかし画面全体を不思議に調和している。左側に大きく開かれた空間、すなわち空と水とが画面に広がりを生み出している。ほぼ黒一色の画面に見えるが、水上の小舟には代赭、画面下方の豆粒大の人物に藍がわずかに施されることで色彩感が豊かなものになっている。

「山高水長」の題は、漢の高士嚴子陵の人品節操の高潔なことを、山の高く流れの長いのにたとえて誉め称えた言葉。題貫によれば、大分出身の著名な詩僧、雲華上人が酒を携えて玉堂を訪問し、揮毫を依頼した分で描いたとある。画人と言われるのは恥ずかしい、心の赴くまま筆をとったにすぎないという玉堂の姿勢がここにも感じ取れる。

（主任学芸員 中村麻里子）

浦上玉堂展

日本の美術に深い理解を示したドイツの建築家ブルーノ・タウトは「この人こそ近代日本の生んだ最大の天才である。彼は『自分のために』描いた、そうせざるを得なかったからである。彼は日本美術の空に光芒を曳く慧星のごとく、独自の軌道歩んだ。」と語りました。このタウトによって天才と評せられ、ゴッホに比せられた人物こそ、江戸時代の文人画家浦上玉堂(延享2/1745－文政3/1820)でした。彼は備中鴨方藩士浦上兵右衛門宗純の子として岡山市石岡町天神山の藩邸内で生を享け、50歳で脱藩出奔するまで岡山で過ごしています。以後、東北から九州まで各地を遍歴し、60歳代半ばからは京都を中心に詩書画琴に親しむ自娛自適の生活を送り、76歳で生涯を閉じました。

✦

今日、画家として高く評価されている玉堂ですが、玉堂自身は「写画。而不識六法。漫筆而已。而耻為画人。」(自分は絵の描き方を知らず、気ままに描くものだから画人というのは恥ずかしい。)と記し、画家ではなく、七絃琴の奏者、琴士であることを誇りしていました。そして『玉堂琴譜』に「余、また常に琴を戒めるは、一曲を弾いて止める。多曲を貪る勿れ。(中略)若し高尚の志有らば、一曲にて足る。」という一文を書き遺しています。彼は志をもって一曲を弾けば、それで十分と考えたのです。

こうした玉堂の姿勢は、琴に限らず画業においても何ら変わることがありませんでした。彼がテーマとしたのは、自然です。花鳥画や人物画には関心を示さず、山水画だけを生涯描き続けました。故郷岡山の風景、あるいは会津地方の厳しい雪景色など、実景に基づいて描かれたような作品も遺されています。彼は空疎な絵空事ではなく、自らの漂泊の旅中で見付け、体験した自然を画布にとどめようとしていたのでしょう。しかも、玉堂は詩人であり、琴士です。目にみえないものを歌い、目にみえないものを聴く才に恵まれていたのです。木々のさざめき、鳥のさえずり、風の音、水の瀬音、明るさ暗さ、暑さ寒さ、乾気湿気、あらゆるものに敏感に反応します。視・聴・嗅・味・触、五感で感じた自然の営み、その「気」を、その深遠を描こうとしたのではないのでしょうか。季節感だけでなく、刻一刻と移り変わる時間や天候、そうしたものの微妙な変化がしばしば一図の中に盛り込まれたのも、実体験した自然をそのまま再現しようとした結果だったと思います。

玉堂は職業画家、専門画家であることを拒否し、心の赴くまま筆を執り、筆を揮います。彼は自らの心の動きをそのまま画布の上に表現することに大きな喜びを感じていたのでしょう。そこには、玉堂の内面の陰影やその微妙なうつろいが、実に繊細に描き出されています。現代人のわれわれにとっても、最も文人らしい文人である玉堂の心象風景の美しさは、必ずや深い感動を伴い追ってくるに相違ありません。

✦

本展は日本の南画史上、独自の画境を築いた孤高の存在である浦上玉堂の生涯をたどる大回顧展です。玉堂の地元であり、その研究と紹介を続けてきた私

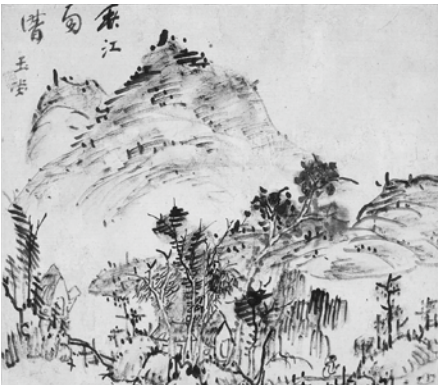
ども岡山県立美術館と、近世絵画の分野を活動の大きな柱としている千葉市美術館との共同企画になるもので、画業の精華としての代表作品はもちろんのこと、書や彼が愛した七絃琴など関連資料も含め、総数約240点を揃えて玉堂の魅力を余すところなく紹介いたします。

これまで玉堂に関する展覧会としては1970年に東京・岡山で「浦上玉堂名作展」、1995年に岡山・林原美術館において「生誕250年記念 浦上玉堂」が開かれています。どちらも70点余りの展示でしたが、この度は近年の玉堂研究の成果を存分に反映させ、新出作品などを大幅に加えた3倍強の数が展観に供されることになっており、まさに史上最大規模の展覧会といえます。と同時に国宝や重要文化財も網羅して、現段階では質的にも最高の作品が集った展覧会に仕上げることができたと思います。

✦

玉堂の誕生地には現在、当館が建っています。今回はまさに生地への里帰り展となりました。お出かけただいて、1800平方メートルの広い展示室に広がる玉堂独自の世界を満喫して下さいと願っています。

（学芸課長 守安収）



浦上玉堂（秋江雨晴図）本館蔵

主な出品作品

南山寿巻(個人)
国宝 東雲飾雪図(川端康成記念会)
山中結廬図(東京国立博物館)
重文 一晴一雨図(個人)
重文 山高水長図(岡山県立美術館)
煙霞帖(梅沢記念館)
重文 山雨染衣図(個人)
重文 籠煙惹滋図(出光美術館)
重文 鼓琴余事帖(個人)
重文 山紅於染図(愛知県美術館)
重文 七絃琴(布施美術館)

■会期

平成18年9月29日(金)～10月29日(日)

休館日 10月2日(月)、10日(火)、16日(月)、23日(月)

会期中に展示替えがあります。

詳細は**当館へお問い合わせ下さい。**

Mite!おかやま



7月21日(金)～8月20日(日) 特別展mite!おかやまを開催した。鑑賞教育の第一線で活躍するアメリカ・アレナスが企画・構成を行い、古今東西、時代や国を超えて集めた作品を、作品同士の関係性や見え方に配慮しながら展示した。我々の祖先がたき火の炎を取り囲んで、その日1日に起こった出来事や様々なことを語り合ったように「作品」を「見て」「語り合ってほしい」ということがテーマである。また、オープニングとその翌日には、アメリカ自身によるトークも開催し、多くの人を魅了した。


ここでは、会期中毎日(7/23(日)～)開催した、ボランティアスタッフによる鑑賞体験ツアーを紹介したい。実施にあたっては、広くボランティアスタッフを公募し、当館ボランティア、小中学校の先生方等、様々な方にご参加いただき、アレナス自身のレクチャーも含め、研修を行った。対話型鑑賞は、簡単そうでいて、その考えを理解し、実践するのは結構難しい。鑑賞ナビゲーターの経験は、この対話型鑑賞の持つ魅力や可能性を理解することにもつながる。展覧会が一過性のものに終わることなく、研修を受けた方が各自の場所で、「炎を見つめながら話す」芽を育ててくださることを願っている。

鑑賞体験ツアーに参加された方々からは、「こんな体験初めて」「作品についてこんなに自分が語れるとは思っていなかった」等々、好意的な感想が多く、こういった鑑賞が広がる期待も得た。あるトークでは、立体作品を取り囲んで輪ができ、話が弾み、作品をいろんな方向から見るために、その輪がくるくる回り始めた。その光景は、キャンプファイヤーのフォークダンスのようでもあり、昔懐かし盆踊りのようでもあった。美術館は、作品と対峙し自身を見つめる厳かな空間でありたい。しかし同時に、そこに集う人々が作品を中心に輪を作り、作品について、そして自身の生活について語り合う場でもあってほしい。作品と語り、人と語らい、忘れかけていたことを思い出したり、日々の何気ないことに気がついたり、新しい発見をしたり..... 美術は決して高尚なものではなく、我々の身近なところにあるものだとより多くの人々に感じてもらえるとうれしい。

（学芸課主幹 廣畑浩）

常設展のここに注目！

古書画・日本画編

<p>常設展における展示替えは、古書画・日本画は毎月、洋画は3ヶ月ごとに行われており、毎回担当学芸員がテーマを決めて展示する作品を主に収蔵品から選んでいます。当館では、館藏品や寄託品をあわせて、現在約4,000点の作品を収蔵しています。時代も分野もバラエティに富む収蔵品は、それぞれが実に様々ないきさつを抱えています。</p> <p>中でも有名なエピソードを持つ玉潤筆〈廬山図〉が、11月3日から12月3日まで展示されます。玉潤は、宋末から元初にかけての画僧です。当時複数の画人が「玉潤」の号を用いていましたが、本図の筆者は玉潤若芬と考えられています。〈廬山図〉は、澆墨で粗放に描かれた作品です。澆墨とは、墨を画面にはねそそいで暈かし、できた墨の染みの形象や墨色にしたがって山水のイリュージョンをつくりだす技法のことをいいます。</p> <p>三疊の山が描かれている本図は、描かれたときはもつと横幅がある画面でした。というのも、かつての所蔵者であった佐久間将監真勝(1570-1642)が、茶掛けに</p>	<p>するために狩野探幽(1602-74)に相談し、画面を3つに切断してしまったのです。原因のほぼ3分の2を占める本図はその後、徳川家光(1604-51)、そして酒井忠勝(1587-1662)、さらに徳川将軍家へと伝来し、今は当館の収蔵庫で次なる出番に備えているのです。</p> <p>今まさに切断されようとしている、今のわたしたちにはショッキングに感じられるそんな光景を想像しながら、本作品を眺めてみるのはいかがでしょう。</p> <p>(学芸員 山吹知子)</p>
<p>重要文化財 玉潤「廬山図」(11月3日～12月3日 常設展示室にて公開)</p>	

郷土ゆかりの日本画家・高橋秋華

研究ノート

高橋秋華(1877-1953)は、明治10年(1877) 現在の岡山市西大寺に生まれた。はじめ同郷で活躍していた石井金陵(1842-1928)に南画を学び、20歳頃には京都の都路華香(1870-1931)、ついで山元春挙(1871-1933)に師事。明治44年(1911)の第5回文展に「春日野」が初入選、以後入選を重ねた。おもな公募展への入選・受賞歴は以下のとおりである。

和暦(西暦)	年齢	入選・受賞歴
明治36年(1903)	27	第5回内国勲業博覧会の出品作「韓信」が褒状を受ける。
明治39年(1906)	30	日露戦捷記念展に「獲物」を出品し1等賞を得る。
明治44年(1911)	35	第5回文展に「春日野」が初入選。①
大正 1年(1912)	35	第6回文展に「芭蕉」入選。②
大正 4年(1915)	39	第9回文展に「繁籬」入選。③
大正 7年(1918)	42	第12回文展に「白馬の御花畑」入選。④
大正11年(1922)	46	日仏交換美術展(パリ開催)に「牡丹図」を出品、フランス政府買上げ。

続いて昭和7年(1932)、一等巡洋艦「摩耶」が建造されるにあたって、秋華は、艦長室に安置される「摩耶夫人の尊像」懸額揮毫を依頼された。「摩耶」の命名のもととなった兵庫県神戸市の摩耶山は六甲山地の中央に位置し、その名は、空海が摩耶山山頂にある天上寺に釈迦の生母・摩耶夫人像を安置したことに由来する。艦長室の「摩耶夫人の尊像」は、昭和19年(1944)にアメリカ潜水艦の雷撃により沈没した「摩耶」と運命を共にした。関係者宅に大切に所蔵されてきた掛幅「摩耶夫人図」は、この艦長室の「摩耶夫人の尊像」を彷彿とさせ、それを制作した名誉を後代まで伝えるために作られたものと想像できる。

（主任学芸員 中村麻里子）

秋華は、賀陽宮家や久邇宮家をはじめ皇室や李王家といった著名人や有力者らの御用画の揮毫依頼を受けるなど、生前は中央で高い評価を受けたが、昭和22年(1947)に岡山へ帰郷、昭和28年(1953)に没した。まさに画業一筋に生きた彼の持ち味である清雅で格調高い画風は、私淑した幕末の岡本秋暉の得意とする花鳥画の世界と、師春挙のモダンで色彩豊かな画風とに強く影響を受けたものであった。さらに自作の句や詩に画を添えた風趣豊かな文人画風の書画も多く見つかっている。あわせて彼の数々の遺品群により、75顆の印章や硯など材料・用具等へのこだわりは相当であったことが伺える。

岡山の近代で代表的な日本画家、小野竹喬・池田遙邨らに関しては調査研究が進んでいるが、在世当時の評価の割には十分な理解を得ていないと考えられる画家について、これまで東京派の林浩幹、地元派の波多野華涯らを取りあげ常設展特別陳列で紹介してきた。このたび没後初めて高橋秋華を特別陳列にて紹介するにあたり、遺族や関係者、所蔵者らからのご協力を得て、新たな作品や資料を実見し多くの情報を得た。彼の画業について振り返ることで、岡山ゆかりの優れた画家たちの層の厚みを再確認することができると思う。

（主任学芸員 中村麻里子）



常設展特別陳列「高橋秋華」